

AN ASIAN BIRD-BANDERS MANUALについて

須川 恒

本年の鳥インフルエンザ関連の標識調査に西日本のバンダーが多くかわり、2004年7月10日西日本のバンダー37名が京都に集まって「鳥インフルエンザと標識調査」と題するシンポジウムを開催した。この概要を紹介するとともに、私が行った報告を紹介する。

今回の鳥インフルエンザ問題にあたって山階鳥類研究所所長山岸哲氏が「今から40年ぐらい前に、アメリカの病理学研究所の依頼で、アジア数カ国の研究機関と協力し、渡り鳥に関するウイルスや、鳥に寄生するダニ類、その他の寄生虫を調べたという記録が残っています。不幸にして、この研究は打ち切られてしまいました。今こそ、こうした取り組みが再開されるべきでしょう。」と述べているように、Migratory Animal Pathological Survey (MAPS:移動動物病理学調査)を再評価する必要がある。東南アジアの鳥関係者で当時ベストセラーと言われたマニュアルをかつて翻訳する機会があったので、そのマニュアルを通してプロジェクトの特色を紹介し、バンダーの課題を探る。

MAPS計画は、感染症研究で伝統のある米軍病理学研究所が基金を出し、H.E. McClure博士指導のもと、日本：山階鳥類研究所・琉球大学(37名)、韓国：Kyung Hee 大学(16名)、台湾：T unghai 大学、マレーシア：マレーシア大学、などアジア14ヶ国20の大学、研究所・博物館の、バンダー計171名(雇用81名+ボランティア70名)がつくったバンディングネットワークである。1963年～1971年の9年間に、放鳥総計1,216種、1,165,290羽、リカバリー235種、5601羽があり、とりまとめの報告書もきちんとでている。

MAPSの時代背景にはスプートニク(1957年)ショックがある。ロシアの宇宙計画の成功が米国の科学基礎研究(他にインターネット、生物教育の近代化など)を刺激し急に基金が得られた。米軍がかかわっていることは、東南アジアにおける存在感や合理的(戦略的)計画の進め方にプラスに働いているが、ベトナム戦争(1964～1975年)の影もあった。ソ連は回収情報を連絡したが、中国は回収情報を全く出さなかった。

以下AN ASIAN BIRD-BANDERS MANUALの目次(は特色があり注目したい部分)。

マニュアルの表紙は回収よびかけのポスター、 標識者の倫理(こころえ)一覧、生きた鳥の扱い方・カスミ網の使用法と注意点、 鳥類グループ別の捕獲法・注意点の記述、バンディング用具、 使用されるトラップ・カスミ網の張り方、 野外調査と標本(寄生虫など)採集用準備品・標本採集法、記録のとり方

1964年版のマニュアルは翻訳され手書きで青刷りされたものがある。その作業は1980年頃、織田山に出入りする京大学生が中心になって行った。翻訳者は、臼井俊二(まとめ役)、宮林泰彦、葉山政治、大迫義人、笹原裕二、前田崇雄(+須川恒)の諸氏で、臼井氏がマックルア氏から公開許可を得た。1997年に村上悟氏がファイル入力した。

MAPSのマニュアルなどを通して見えてくるバンダーの課題としては、

- ・東アジアにおける生捕り法の体系的把握
- ・外部寄生虫等の系統的理解と採集法
- ・東アジアにおける標識計画と基金確保
- ・東アジアの人的ネットワークとコア形成
- ・Zoonoses(人獣共通感染症)への理解を深める
- ・マックルア氏作成のマニュアルにあるアイデアを取り入れたマニュアル作成を試みるなどがある。